Kansai University

國的展開を見ることができるのである。本研究課題の最終的な目的はそうした文化的状況のあり方を典禮問題に關連づけることにあった。この関連において宣教師がもたらした西洋天文学の知識が清朝の暦法『時憲暦』にそれをめぐって生起したキリスト教の教義と中国の儀礼等との矛盾について考察を開始したこともこの課題への取組の特徴である。

朝鮮陽明学派の研究

A Study on Chosen Yang-ming School

中　純夫

平成17年度は、まず4月30日(土)～5月2日(月)の日程でソウルにて研究出張を行った。5月1日には宗廟大祭を参観、5月2日には成均館大学校を訪問した。また9月24日(土)から27日(火)までの日程で台湾中央研究院中国文哲研究所（台北市）を訪問し、9月26日(月)には同研究所にて学術講演会を行った。演題は「論鄭寅普著『陽明学演論』「朝鮮陽明学派」―朝鮮陽明学研究的諸問題―」（中国語）である。10月21日には関西大学アジア文化交流研究センターにおいて、思想・儀礼研究班の第4回研究会の研究発表を行った。題目は「王守仁の文廟従祀問題～中国と朝鮮における陽明学観～」である。以上の活動に加えて17年度は主として (1)朝鮮陽明学研究史の整理と評価、(2)王守仁の文廟従祀問題、に関する研究に取り組んだ。

18年度は6月16日(金)東京大学において科研研究報告を行った。発表題目は「鄭斉斗『霞谷集』版本の諸問題」である。また8月28日(月)～30日(水)の日程で、高麗大学校及びソウル大学校奎章閣において資料の調査収集を行った。これらの活動に加えて18年度は、主に (1)張烈『王学質疑』における陽明学批判の論点について、(2)信斎李令翊と椒園李忠翊における陽明学受容の問題について、(3)鄭斉斗の後裔に関する基礎調査、といった研究に従事した。

総じて中国近世思想史と朝鮮近世思想史とを並行して研究している。

5　比較文化研究班　（主幹）野間　晴雄

(1)　班別研究報告書

システムとしての文化の比較文化研究
―大航海時代を中心としたヨーロッパとアジアの邂逅―

Comparative Cultural Research of as a System
―European and Asian Encounters Focused on the Age of Exploration―

アジアやアフリカに到達したヨーロッパ人との接触による変化を，広義のシステムとしての文化としてとらえ，その比較研究を，歴史地理学，イギリス法制史，アフリカ社会経済史，文化地理学，地図学を専門分野とする研究者で研究班を構成して，学際的に解明することを目的とする。

時間幅としては，狭義の大航海時代と，そのあとに続く18～19世紀までの植民地体制が深化する時代までも柔軟に含め，ダイナミックなグローバルヒストリーの確立をめざす。

個別研究としては以下のとおりである。野間はアラビア海，インド洋，南シナ海の港市ネットワークと港市の構造について現地調査を交えて論じた。北川はアフリカ大陸の東・西沿岸部を「異文化交流圏」として位置づけ，西アフリカ沿岸におけるヨーロッパとアフリカの邂逅について国内外での史料所在調査と分析を試みた。朝治は「大航海時代の日本とイギリス」として，16～17世紀の日英のあり方を文書学の観点も含めて考察する。橋本は台湾調査でこれまで収集した資料に加えて，17～18世紀のアジア東部へのヨーロッパ人進出による農耕への影響を論じた。三好唯義（委託研究員）は，大航海時代にアジア地域の地図作成に関与したスペイン，ポルトガル，オランダなどの地図情報の伝播流布と描かれた世界地図の地図学的考察を行った。

研究例会発表実績

◇平成17年度

12月16日(金)

野間　晴雄「比較文化研究班のねらい」

北川　勝彦「南アフリカの文書館訪問記」

朝治　啓三「イギリスから見たリターン号事件，1673年」

NII-Electronic Library Service

Kansai University

◇平成18年度

11月10日㈮

北川　勝彦「インド洋におけるアフリカ人，アジア人及びヨーロッパ人の出会い—その予備的考察—」

野間　晴雄「アジア海域ネットワークと港市の生成・展開・衰退—東西ユーラシア海という類型についての予察—」

刊　行　物

☆『東西学術研究所紀要』第38輯，平成17年4月1日刊行

野間　晴雄「18世紀後半英領インドにおける地図作製事業とレネル—「帝国」と地図のポリティクス(1)—」

☆『東西学術研究所紀要』第39輯，平成18年4月1日刊行

朝治　啓三「リターン号事件と十七世紀後半の国際関係」

Tran Anh Tuan "An Analysis on the Land Reclamation process of Tien Hai District, Thai Binh Province, Vietnam in 19th century"

☆『東西学術研究所々報』第80号，平成18年4月30日発行

橋本　征治「巻頭言　新たな出発にあたって」

その他の活動

1．2006年1月31日～2月1日（神戸市立博物館，六甲荘）合宿研究会

神戸市立博物館で三好唯義委託研究員の案内で館所蔵の大航海時代の次の古地図18件を全員で熟覧した。ミュンスター世界図（16世紀中頃），カルデル世界図（1550？），オルテリウス世界図（1587），プトレマイオス世界図（1605），ブラウ世界図（1635），ブラウ世界図（1635），ティセラ日本図（1595），東アジア図（1552），東インド諸島図（1570），タルタリア図（1570），中国図（1584），カスタルディ西半球図（1550？），ミュンスター新大陸図（1550年頃），オルテリウス太平洋図（1589），シルヴァヌス編プトレマイオス地図帳（1511），オルテリウス『世界の舞台』（1570），リンスホーテン東インド地域図（1596），ベハイム地球儀複製（1492）。

さらに研究会では，朝治啓三「一七世紀の英国と日本—文化の相互影響について—」発表，野間晴雄「フィリピンにおける文化接触の一断面—イフガオ族の棚田とバギオで考えたこと—」，寺尾直貴「イングランドへのノルマン人の定着とイングランド人」，橋本征治「サツマイモの伝播と大航海時代」の発表があった。

2．研究班としての外部資金

日本学術振興会・萌芽研究「イギリス東インド会社とアジア・アフリカの邂逅をめぐる文化システムの研究」（研究代表者・野間晴雄，課題番号17652069）で，北川は南アフリカでの史料調査，朝治は国際学会での成果発表（オーストラリア，アメリカ合衆国），野間は研究打合せ（ラオス）に外国出張した。また，東西学術研究所主催シンポジウムの開催費用の一部に充当した。

また，平成17年5月30日には浅田實（創価大学名誉教授）「東インド会社—その歴史と話題」の話題提供を東西学術研究所で受けた。

3．東西学術研究所主催シンポジウム「アジア・世界をつなぐ海の回廊—文化の出会い—」

平成19年1月19日㈮～20日㈯に東西学術研究所主催（人文地理学会協賛）でのシンポジウムムを開催した。この全体の構想はわれわれ比較文化班と世界習俗班が中心となった。われわれに関連する発表としては，基調講演の生田滋（大東文化大学名誉教授）「ヨーロッパ人にとってのアジア，アジアにとってのヨーロッパ人—大航海時代を新しい視点から見る」が行われた。さらに以下の関連する研究発表を行った。

第1セッション：アジアと世界の出会い—大航海時代を中心として—

野間　晴雄「アジア海域ネットワークと港市—生成・展開・衰退の東と西—」

朝治　啓三「英船リターン号の事件（1673年）とオランダ東インド会社の対日交渉」

北川　勝彦「インド洋におけるアフリカ人，アジア人およびヨーロッパ人の出会い」

三好　唯義「ヨーロッパ製掛地図と日本製地図屏風」

ラタン・ラル チャクラボルティ（元ダッカ大学教授・科研研究協力者）「インドにおける東イ

NII-Electronic Library Service

Kansai University

ンド会社とヨーロッパ列強との出会い」（野間代読）

第２セッション：島人たちと外界との文化邂逅
—日本・台湾・フィリピン—

橋本　征治「タロイモ栽培と伝播—日本・台湾・フィリピンの文化邂逅—」

４．準研究員の実績

２年間に以下の２名の準研究員が研究成果を発表した。

寺尾直貴（関西大学大学院文学研究科・博士課程後期課程）任期　平成17～18年度

- 「ウィリアム征服王治世におけるイングランド人—ハンティンドンシァの事例—」，史泉（関西大学史学地理学会）104号，2006，1～16頁。

Tran Anh Tuan（関西大学大学院文学研究科・博士課程後期課程，現ベトナム国家大学ハノイ校地理学部講師）任期　平成17年度

- 博士学位論文（平成18年３月23日）*Institutional Analysis on the Contemporary Land Consolidation in the Red River Delta— A Case Study at Village Level in Tien Hai District, Thai Binh Province*
- Institutional Analysis on the Contemporary Land Consolidation in the Red River Delta: A Case Study at Village Level in the Tien Hai District, Thai Binh Province, Vietnam", 人文地理, Vol.58, No.1, 2006, pp.20-39
- "An Analysis on the Land Reclamation Process of Tien Hai District, Thai Binh Province, Vietnam in 19th Century",『東西学術研究所紀要』第39輯，2006，pp.59-79.

(2) 個別研究報告書

インド洋，南シナ海沿岸の商館・港市ネットワークと港市の構造

Factories and Port Polity Networks and their Structures in the Indian Ocean and the South China Sea

野間　晴雄

15世紀の世界的な大航海時代の開始に先行するアジアの大航海時代から19世紀に植民地の枠組みが成立した時期のアジア港市のネットワークとその都市としての構造について，各種史料や古地図をもとに，後背地との関係も取り込んで考察した。その結果，「東ユーラシア海ネットワーク」，「西ユーラシア海ネットワーク」のアジアに成立した海２つの域ネットワーク類型を析出して，その事例として，前者では福建省の廈門，泉州，福州などの東シナ海沿岸交易と域外交易，ベトナム中部のホイアンを中心とした日本，中国の出会い交易の特色を論じた。後者の事例では，ベンガル湾のイギリスやフランスの商館，植民都市としてのカルカッタと，インド洋沿岸のスーラトやボンベイをとりあげた。

さらにフィリピンにおいては，マニラがスペイン領メキシコからの銀を介した東ユーラシア海交易のアジアでの中継点としての役割に注目した。ルソン島北部のバガンはカトリック教会組織とセットになったスペインの領域支配の拠点で，広場を中心とした都市プランはイギリスの港市とは異なる都市プランからなることを指摘した。

今後は，アラビア海やインド洋西岸の港市の事例と琉球，インドシナ半島の事例をつみあげて，課題の深化を図りたい。

イギリス東インド会社の対日交渉の研究

Mercantile policy of Briish East India Company toward Tokugawa Japan

朝治　啓三

一六七三年五月二五日にイギリス東インド会社の商船リターン号が、一六二三年以来途絶えていた貿易の再開を求めて、長崎に入港した。約二か月の後、幕府はこの求めを拒絶し、リターン号は何一つ売却できずに日本を去った。この事件が持つ歴史上の意義を、一七世紀後半の国際関係の中で考察するのが、私の研究課題である。先行研究においては、これは日本史研究者による国内問題としての扱いか、あるいは経済学者による西力東漸過程研究の一部としての扱いでしかなかった。英国公文書館や台湾商館史料をもとに研究した結果、先に日本との貿易に成功していたオランドとの競争、一六四四年以後東アジアでの帝国的権力構造の構築を進めていた

NII-Electronic Library Service

Kansai University

清朝と日本、および英国の対応の違いを考慮に入れて考察すべきことを、第１次の結論とした。これを研究例会で報告し、後に『紀要』39号に掲載した。さらに二年度目には東西研シンポジウムのため、史料調査を継続し、大英図書館所蔵史料に基づき、英国商社と政府が、アジアへの英国産毛織物の販売計画に挫折し、一八世紀初め以降は、対日貿易よりもアジア全体に対する貿易構造のなかで、清朝との国交を捉えていたことを第２次の結論とした。その成果は近く『紀要』40号に掲載予定である。

大航海時代におけるアジアとヨーロッパの邂逅
―ヨーロッパとアジアに生きたアフリカ人―

Asians Encounter with Europeans in the Age of Discoveries with special reference to African Diasporas

北川　勝彦

本共同研究では、研究分担者は、当該時期のヨーロッパ、アフリカおよびアジアにおけるアフリカ人とヨーロッパ人の遭遇と交流の諸相―思想、通商、文化―を考察する。研究分担者の主たる役割は、ヨーロッパとアジアの邂逅の歴史的展開にアフリカという要因がどのようにかかわってくるかを検討することで、ヨーロッパ－アジア関係史の理解を進展させるところにある。

平成17年度には、９月３日から17日にかけて本共同研究のテーマにかかわる資料調査のために南アフリカ共和国に赴いた。今回訪問した文書館は、ケープタウン大学のアフリカ研究図書館(African Studies Library, University of Cape Town)、南アフリカ国立文書館のケープ文書館（Cape Archives, National Archives of South Africa）およびクワズールー・ナタール大学のキリー・キャンベル・アフリカーナ図書館（Killy Campbell Africana Library）の３箇所であった。この成果は、平成17年12月16日の東西学術研究所第４回研究例会（比較文化研究班）において「南アフリカの文書館訪問記」として報告した。また、平成18年度には、11月10日に児島惟謙館で行われた研究所例会（比較文化研究班）において「インド洋におけるアフリカ人、アジア人およびヨーロッパ人の出会い―その予備的考察―」と題して、大航海時代におけるアフリカ人のアジアへの移動に関する諸研究をサーベーした報告を行った。本報告は、平成19年１月19日、20日に行われた東西学術研究所主催の国際シンポジウムの予備報告である。なお、平成17年度および18年度の研究を通して、これまでアフリカ人の移動の研究が大西洋を舞台とするものが主であったが、インド洋、ひろくは海洋アジアへの移動の実態が明らかにされ、最近、しばしば論じられるようになった「ディアスポラ現象」を理解する枠組みの精緻化に一定の貢献が可能であることが示された。

外来作物導入と根栽農耕システムへの影響に関する比較研究

A Comparative Study of Introduction of the Immigrant Crops and Influence to the Farming System of Vegetative Planting Crops

橋本　征治

平成17年度から19年度と，３年間にわたる科学研究費補助金、基盤研究(C)：「黒潮ルートのイモ栽培文化―琉球弧の島々と台湾―」の交付を受けて、本研究班での個別研究活動「外来作物導入と根栽農耕システムへの影響に関する比較研究」を実施するための資金的な裏付けをうることができ、それに基づいて研究活動を計画し、実施した。まず、平成17年度においては、従来から継続的に実施してきた南西諸島、特に沖縄の根栽農耕に関する調査研究を引き続きおこなうとともに、新たにサツマイモ等の外来作物に関する資料収集も行った。新たな展開として、前年度から準備を進め、すでに２回にわたって予備調査を行ってきた台湾の本格的な調査・研究活動に取り組んだ。８月には研究協力者とともに台湾調査を実施した。すなわち、台北・台東・高雄で資料と文献の収集をおこなうとともに蘭嶼での実地調査を行い、多くの成果をあげることができた。18年２月にはフィリピンを研究の視野に入れるため、フィリピン、マニラでの文献・資料収集とマウンテン州での実地調査をおこない、研究の基礎を固めることができた。

18年度は引き続きフィリピン（２回)、沖縄での資料収集と実地調査を行い、研究の深化に努めた。

NII-Electronic Library Service

Kansai University

特に、懸案であったフィリピンのバタン諸島調査の目処が立ち、実施する運びとなった。ここでは根栽農耕に関する研究とサツマイモ等の外来作物の導入についても研究をおこなう。

これらの成果の一端を、東西学術研究所主催のシンポジウム「アジア・世界をつなぐ海の回廊―文化の出会い―」において、「タロイモの栽培と伝播―日本・台湾・フィリピンの文化邂逅―」と題して発表した。

ヨーロッパ製世界地図と日本製地図屏風

European World Maps and Japanese Folding Screen Maps

三好　唯義

16世紀末期～17世紀前半における日本人絵師が描いた地図屏風は，東西文化交流の結晶ともいうべきものである。特に，現在は宮内庁三の丸尚蔵館に保管される『万国絵図屏風』は，原本となったヨーロッパ製世界地図も判明しており，日本側への受容と変容の過程が考察できる。

以前よりこの屏風に注目していたが，今回あらためて整理しなおしてみた。まず原図となった1609年版カエリウス世界図は現存しないため，その前後の世界地図を用いて復元を試みた。次に，その図から生み出された三屏風（宮内庁図，香雪美術館図，神戸市立博物館図）を比較する。

その結果，最も原本の姿をとどめるもの，つまり受容成果としては宮内庁図が最も優れており，香雪美術館図・神戸市立博物館図の順に劣ってゆく。このことは，描かれた時代の違いも意味していると思われる。次に変容部分を挙げれば，日本列島および周辺地域の描写が，ヨーロッパ製原図よりも優れていることに注目した。その主体者は，洋風画技法の習得と世界地理の知識などから考えても，イエズス会ならびにポルトガル人の関与が考えられる。日本列島内に印された都市マークからは駿府が特定でき，徳川家康との関連が想定され，彼が見たと史料に記されている南蛮世界図屏風が，宮内庁図であることの蓋然性はかなり高まったと思われる。

いずれにしても，ヨーロッパ製壁掛け地図が大きな役割を果たしていることは明確で，それがどのようなルートでもたらされ，どのように受容され変容してゆくのか，さらなる考察の必要性を感じた。

6　世界習俗研究班　（主幹）浜本　隆志

(1)　班別研究報告書

「通過儀礼」比較研究

Comparative Studies on Rites of Passage

われわれの研究班では、17年－18年度の研究例会において、下にも記したが、熊野建が「イフガオ族におけるフィエスタ：農耕儀礼と儀礼的遊び、その変容」を、浜本隆志が「聖ニコラウス祭と秋田のナマハゲ―ヨーロッパと日本の冬至祭―」というテーマで発表した。なお大島薫は平安時代の儀礼研究を、森貴史は18世紀の南太平洋の習俗の研究を継続した。

次にわれわれの研究班として、平成19年１月19日－20日に開催された東西学術研究所シンポジウムにも参加し、おもに第３セッション「食文化を通してみたアジア・世界の出会い」を担当した。個別の発表は以下の通りである。

浜本隆志　マイセン磁器と食文化
　　―景徳鎮・伊万里・マイセン―
熊野　建　食をとおしてみたフィリピン：
　　低地社会と山地社会との比較
大島　薫　宗教が運んだ食文化
　　―アジアから日本へ―
森　貴史　クックがみたタヒチの食と儀礼

なお、この発表については、現在、各自が活字化の作業をしているところである。個別研究については各研究員が提出した報告書に記載されているが、本研究班のテーマとかかわるものとして、

浜本隆志「図像で読み解く魔女の世界(4)-(6)」関大生協『書評』平成17年４月－18年９月
　　『モノが語るドイツ精神』（単著）新潮社　平成17年
熊野　建「北部ルソン島イフガオ族の伝統的シャーマニズム再考」関西大学『社会学部

NII-Electronic Library Service